奏楽者の風箱♪

No.43　2026.10

発行：日本聖公会北海道教区礼拝委員会

共に礼拝する一人としての奏楽

司祭　クリストファー　永谷　亮

神学校の特別授業での講師の先生によるお話が今でも心に残っています。今回はそのことを元にしながら、共に礼拝に与る者として書かせていただきました。

奏楽者の席に座ると、礼拝が始まる前から考えることがたくさんあると思います。前奏はどのくらいの長さにしようか。最初の聖歌は何番だったか。テンポは速すぎないか。次のチャントや聖歌の楽譜を開いておかなければ――。礼拝が始まってからも、奏楽者の頭の中はとても忙しいと思います。聖歌を歌っている会衆の声を聴きながら、奏楽者の目は次の小節を先取りしていきます。聖書朗読を聴きながらも、その後に何を弾くのかが気になるでしょう。祈りの言葉を聞きながら、奏楽者の席からいつ立ち上がればよいのかを考えていることもあるかもしれません。礼拝を支える役割を担っているからこそ、どうしても少し先のことを考え続けることになります。

そんなとき、ときどき思い出したいことがあります。それは、奏楽者もまた、礼拝する一人だということです。

聖公会の礼拝は司式者が行うものを会衆が見守るというものではありません。祈祷書に従いながら、み言葉を聴き、それに応答し、共に祈り、聖歌を歌い、聖餐にあずかる。そこに集められた一人ひとりが共に献げる「共同の祈り」です。奏楽者も、この共同の祈りから離れたところにいるわけではありません。奏楽席に座っていても私たちは会衆の一人であり、み言葉を聴き、祈り、神さまの恵みを受け取るために礼拝へと招かれています。

そう考えると、奏楽奉仕のあるべき姿も少し違って見えてくるかもしれません。聖歌の伴奏は自分の演奏を聴かせるためのものではなく、会衆の歌を支え、自らもその歌に加わるためのものです。前奏や後奏も、単に礼拝の空白を音で埋めるためではなく、その日に与えられたみ言葉や教会暦の期節と響き合いながら、人々の祈りに寄り添うものでしょう。私たちは祈祷書や聖書日課を通して、自分たちの教会だけではなく、広く教会の祈りにも連なっています。奏楽もまた、その大きな祈りの流れの中に置かれています。

奏楽の奉仕において、もちろん、なるべく間違えないように弾くことも、よい音を奏でることも大切で、そのために練習することも必要です。しかし、礼拝の中で求められているのは、完璧な演奏ではありません。ミスタッチをしても、思ったように弾けなくても、それによって礼拝そのものが損なわれるわけではありません。むしろ大切なのは、奏楽者自身も、その礼拝の中に身を置いていることではないでしょうか。会衆の歌声を聴き、その歌声を支えながら、自分もまた祈る。聖書の言葉に耳を傾け、沈黙の中に共にとどまり、聖餐の恵みに共にあずかる。そうした礼拝全体の中に、奏楽の奉仕も置かれています。

奏楽者は礼拝を支えます。しかし同時に、奏楽者自身も礼拝によって支えられる人です。奏楽者の席に座る一人ひとりも、神さまに招かれ、教会の人々と共に祈りを献げる一人の礼拝者であることを、覚え続けることができればと思います。

『教会は歌う ―礼拝の音楽 Q&A―』の発行に寄せて

東日本教区　エリザベス　菊池泰子

昨年 10 月発行の『奏楽者の風箱』No.41 で、「首を長くしてお待ちください」とお知らせしてから、ちょうど一年。いよいよ『教会は歌う―礼拝の音楽 Q&A―』が、皆さまのお手元に届く運びとなりました。執筆は私が担当しましたが、内容や構成については丸山悦子さん、そして教区礼拝委員の皆さまと話し合いながら生まれた本です。

北海道と東京という地理的な距離がありながら、このような作業を進めることができたのは、zoom のおかげでした。話し合いは数十時間に及びました。丸山さんとこれまでの研修会や奏楽クリニックを振り返りながら構成を考えているうちに、研修会での出来事や交わりを思い出し、たびたび話が脱線することもありました。そして「あれも書きたい、これも書きたい」と話しているうちに、最初に思い描いていた本は少しずつ形を変え、いつの間にか大きく成長していました。当初は『奏楽者の風箱』に掲載してきた Q&A をもとに、奏楽者のためのハンドブックのような本を作る予定でした。しかし、実際に作業を進めていくと、取り上げる問いは 40 に増え、奏楽者に必要な知識や技術的なことだけでなく、礼拝の中で音楽はどのような役割を担っているのか、教会はどのように礼拝の音楽と関わっているのかなど、奏楽者だけでなく、聖職者をはじめ、礼拝に集うすべての方に読んでいただける内容になりました。

この本は六つの章から成っています。 奏楽を務めることになった信徒の素朴な疑問から始まる第 1 章「始まる」に続き、第２章「祈る」、第３章「話し合う」、第４章「歌う」、第５章「奏でる」、そして第 6 章「広がる」で結ばれています。一つひとつの問いを追いながら、物語を読むようにも読んでいただける構成を目指しました。この本に書かれていることの多くは、これまで北海道教区で行われてきた研修会や奏楽クリニックで取り上げたこと、そしてそこでの皆さまとのやりとりが土台になっています。参加された方には、復習として、また懐かしい思い出として読んでいただけるところもあるかもしれません。

今回の執筆と編集を進めるなかで、礼拝音楽とその周辺にある事柄を言葉にすることの難しさを、丸山さんと私は何度も実感しました。礼拝音楽についての考え方や感じ方は、聖職者、信徒を問わず、一人ひとり異なります。だからこそ、できるだけ多くの方に読んでいただけるよう、何度も推敲を重ね、教区礼拝委員の皆さまも校正作業に加わり、さまざまな視点から支えてくださいました。

北海道は、かつて私にとって未知の教区でした。それが 2008 年に始まった研修会から 18 年の年月が経ち、今では故郷のような教区となりました。何より「歌う」ことを大切にしながら、皆さまとともに礼拝音楽について学んできた時間は、私自身にとってかけがえのない学びとなっています。



この『教会は歌う ―礼拝の音楽 Q&A―』が、北海道教区から生まれた一冊として、ここで終わるのではなく、それぞれの教会で新しい学びや交わりを生み、さらに礼拝の音楽について話し合うきっかけとなれば幸いです。そして、そこから生まれた思いや学びもまた広がり、すべての教会で祈りの歌や音楽が豊かに響くことを、心から願っています。

神さまがこれまでの道を守ってくださったことに感謝し、これからも私たちを導いてくださるように祈ります。

（書籍入手方法は p6をご覧ください）



鐘をたずねて



―帯広聖公会―

帯広聖公会　オーガスチン 橋本知樹

明治２４年、伝道師鯨岡寅吉師が北海道東海岸伝いに巡回伝道の折、現在の豊頃町大津において聖公会信徒の内海勇太郎氏より、内陸の帯広にもキリスト教信者の移住者がいるとの風聞を聞き、調べたところ依田勉三氏率いる開拓者団、晩成社々員で日本基督教会信徒である渡邊勝氏他と遭遇、同氏宅をキリスト教講義所として伝道開始したのが帯広聖公会教会史の始まりである。初代の教会礼拝堂は明治３１年、帯広市東一条南九丁目に竣工落成、その後二度の改築、移転を経て現在地に移転したのは１９５８年（昭和３３年）のことであった。建築当時「鐘楼」は西側壁面北寄に設置され、間口一間四方の塔屋で、鐘は三口据えられていた。螺旋式の階段を昇り，二階の聖歌隊席の入口を経て更にもう一層高い最高部には梯子段で辿り着いた。四方の硝子窓を開け放ち、「毎日曜日に鳴らされる聖公会の鐘の音」として近隣の皆さんに親しまれてきた。この鐘の内一口は上田教区主教が当時日本に派遣されていた英国人宣教師経由で同国から帯広聖公会に贈られたものとの伝聞がある。他の鐘はおそらく当教会歴代で用いられた鐘と推測される。戦時中、金属供出命令に対して当時の牧師であった木末　登司祭が全ての鐘を秘匿し守り抜いたとの逸話が残されている。

さて、１９７５年（昭和５０年）１２月、当教会に一口の鐘が寄贈された。（写真に見える左側の大きな鐘）寄贈者は銘板にあるとおり，伊藤経作氏とご子息の伊藤十勝（じゅっしょう）氏である。伊藤経作氏については、地元紙が昭和３３年に刊行した「おびひろ・今と昔」なる冊子の人物評として次のような記述がある。「ホシ薬局の伊藤経作氏は立志伝型の男。生まれは越中（富山）で子どもの頃十勝国本別町の伊藤家の養子となった。その後帯広の薬舗に丁稚として奉公。17歳の時上京、苦学の末明治薬学校を卒業、紆余曲折の後帯広市内で薬局を開業、労を厭わずコマ鼠の如く働いた。救世軍帯広小隊の士官として街頭に賛美歌を歌い、毎日店員を集めて聖書を説き、人を捉えて談論風発という半面に粗忽の生む愛嬌もあって市民から親しまれた。」とある。いつも黒塗りのドアに白ペンキで「神は愛なり」と書かれた車で走り回っていた姿が偲ばれる。十勝氏は当教会で受洗・受按、天に召された際も当教会から旅立って逝かれた。

２０１６年12月、経年劣化により鐘楼部からの浸水ひどく、厨房増設改修工事の際に撤去し、改めて鐘楼を地上に設置し現在の姿に至っている。鐘撞きは年間当番表を用い信徒が交替で行っており、奏法は「アンジェラスの鐘」に倣い「低・高・中×３回、高９回」としている。毎主日礼拝開始時は固より、原爆投下時の鎮魂点鐘などの際には教会信徒のみならず一般市民も共に祈る機会としている。実に長い歴史の中で様々な人々の思い、願い、祈りが込められた鐘の音が今も響いている。



三つの鐘



寄贈者銘板



現在の鐘楼

あるカウボーイの願い

函館聖ヨハネ教会　セシリア　丸山悦子



「出棺の時に、ウエスタンの曲で送ってほしいんですって！」そう聞いたのは、道南駒ケ岳の麓で馬牧場を経営され、毎年 11 月にはリースを作るための木々の枝をたくさん山から教会へ届けてくださっていた S さんが、緩和ケア病床に移られ、天国への旅立ちの準備をしておられる時でした。葬送式用に選ばれた愛唱聖歌は、どれも明るい曲ばかり。「好きなところで、好きな仕事をしてきたから、いい旅立ちなんです」と奥様がおっしゃいました。ご本人は、西部劇の映画のエンディングに流れていた曲で送ってほしい。でも、映画の題名も曲名も、うろ覚えだというのです。

牧師が許可してくださるなら、なんとかご本人の希望をかなえて差し上げたい。そういう気持ちが膨らみました。でも、短い時間で、わずかな情報から、どうやってその曲を探したらよいのか……。その時、「AI の力を借りてみよう」と思い立ちました。PC に向かって「ウエスタンの曲を探しています」と書き込むと、「歌っているのは男性ですか、女性ですか」「映画に出てくる人物の名前で覚えているものはありますか」など、いくつかの質問が返ってきました。そして、2 つの曲の可能性が示されました。さらに詳しい情報を本人に尋ねるようにとのことでしたが、すでにその時、ご本人はお話しできる状態ではありませんでした。年代などから、候補は *The Good Times Are Comin'* という一曲に絞られました。「本人は今、天国への凱旋の時にあり、直接話すことができない。でも、『次に生まれる時も、俺はカウボーイでありたい』という内容のウエスタンの曲を、出棺の時にかけてほしいと言っていた」と伝えました。すると、AI から意外な返事がありました。「選んだ曲は、古い西部の時代が終わっていくことへの郷愁を歌った曲。『次に生まれる時も……』という内容とは一致しないでしょう」ここまでやり取りをしたところで、S さんは天国へ召されました。

葬送式の司式をされる牧師に、これまでの経緯を伝え、奥様と相談してほしいとお願いしました。牧師は曲の歌詞を調べ、音源も聴いたうえで、「この曲なら出棺の時に使いましょう」と言ってくださいました。説教の初めには、この曲の冒頭部分が流されました。「西部の古い時代がなくなったとしても、自分はカウボーイとして生き続けたいという願いが、S さんにはあったのだろう。日本でも馬牧場が減っていくなかで、自分は最後まで、そして生まれ変わっても、またカウボーイとして歩みたい、という願いが込められていると思います。」 奥様も、ご挨拶の中で、「その通りの人生だった」と感謝を述べられました。

ご本人とご家族の希望を知り、ウエスタンの曲を探すお手伝いをし、それを牧師につなげることができたことは、奏楽奉仕者として生涯忘れることのできない経験となりました。これまで数多くの葬送式のお手伝いをしてきましたが、今まで選んだことのない、明るさの中にも静かに思いを巡らすことのできる曲を、前奏と献花の時に弾きました。参列された、馬を通してのお友達やご近所の方々からは、「本当に素晴らしいお見送りができて、S さんが羨ましい」と言われたそうです。

今頃は天国で、イエス様の牧童として、たくさんの動物や人々のお世話をされていることでしょう。S さんの魂の平安を祈ります。

礼拝委員会より

祈祷書改正続行中

改正作業の進捗状況



現行の『1990 年祈祷書』が発行された後、海外の諸聖公会でも祈祷書が改正される中、日本聖公会でも 2014 年に祈祷書改正準備委員会が設置されました。2016 年にはそれを継承した現在の祈祷書改正委員会が発足して作業が始まり、その 10 年後にあたる今年の 8 月 31 日～9 月 2 日に開催された日本聖公会第 71(定期)総会において、これまでの同委員会の報告が承認されました。現在の改正祈祷書(試用版)は、項目ごとの作業チームで分担して行った研究成果を反映して分冊で発行されたもので、その後も現場の様々な声をフィードバックしつつ修正作業が行われていますが、2027 年夏頃には主要な部分を一冊にまとめた試用版が発行できるよう、さらに作業を進めることになりました。また、新たに感謝聖餐式のチャントの曲譜が坂本日菜さん(横浜教区)の作曲で提出されています。より多くの皆様にお届けできるよう、管区のホームページには楽譜とともに、歌入りとオルガン伴奏のみの音源も収録されていますので、ぜひご活用ください。

日本聖公会管区事務所ホームページ
管区諸委員会 ・祈祷書改正委員会 → 改正祈祷書のページ(試用版はこちら)
→ 改正祈祷書試用版 →【参考】礼拝式文用曲譜

(礼拝委員／札幌キリスト教会 ヨハネ 福島康高)



「教会は歌う」―礼拝の音楽 Q＆A―の出版にこぎつけました。2024年3月の礼拝委員会にこの提案がだされ、2024年9月の常置委員会で賛同をいただいてから、実に2年の歳月が流れました。著者の菊池先生と「いつかこんな本ができたらいいね」と夢を語り合ったのは、さらに数年さかのぼります。今号の巻頭言、そしてカウボーイの葬儀のお手伝いの話など、振返ってみれば、すべてこの本に記されていることにつながっています。私の教会には奏楽者はおらず、ヒムプレーヤーを使っているから・・・。と思っておられる方、ヒムプレーヤーの使い方の項目もありますよ。今回の出版が、「ようやくゴールにこぎつけた」のではなく、この本を手に取って読み、本を持って教会に行き、みんなで話し合ってみる「スタートとなる」ことを願っています。

2026年9月に終わったNHKの朝ドラ「風薫る」の最後、看護についての本が出版されるシーンで主人公の2人が「たくさんの人に手に取ってもらいたい」と願う姿に、菊池先生も私も自分たちのことを重ねていました。これまで力を貸してくださった方々、そしてこれからこの本が広がっていくために力を貸してくださる方々、なによりここまで導いて下さった神様に感謝します。

(丸山悦子)



「教会は歌う　－礼拝の音楽 Q&A－」出版されます！

北海道教区礼拝委員会より、『教会は歌う　－礼拝の音楽 Q＆A－』が出版されることとなりました。2008 年より始められた研修会より生まれたニュースレター「奏楽者の風箱」に2017年まで掲載された「情報箱からの Q&A」を再構成し、加筆・修正した書籍です。奏楽者の視点から書かれた書籍ではありますが、奏楽者のみならず、聖職者はじめ教会に集う人々がお読みくださり、より豊かな奉仕へと歩むための一助となることを願っています。



著　者：菊池泰子
編　集：日本聖公会北海道教区礼拝委員会
発　行：日本聖公会北海道教区

A5版　本文99ページ
ISBN978-4-9915104-0-3
2026年10月下旬発行予定

書籍献金1冊1000円（＋送料実費）をめやすとして献金願います。

入手ご希望の方は、下記の要領でお願いします。

① メール（e-k-maru@msb.ncv.ne.jp）で、氏名、送付先住所、必要冊数をお知らせください。
② 書籍献金、送料を下記の振替口座に入金してください。
　　ゆうちょ銀行　振替口座　02750-5-49991
　　（他行から振り込まれる際は、店番二七九　当座 0049991
　　口座名義　丸山悦子
　送料は、1～2冊　210円、 3冊～6冊　430円　 それ以上はご相談ください。

振り込みが確認されましたら、発送いたします。
ご不明な点は、同じメールアドレスまで、お問い合わせください。あわせて、本書の感想なども歓迎いたします。

ニュース、質問等、皆さんの声をお待ちしています。

情報箱　投函先
郵便：040-0054　函館市元町 3-23　函館聖ヨハネ教会　教区礼拝音楽情報箱
FAX：0138-23-5656　（函館聖ヨハネ教会）
E メール：e-k-maru@msb.ncv.ne.jp（丸山悦子）